

# 東洋學叢

—— 里道德雄追悼号 ——

縁起と縁起説〔下〕

森 章司 (13)

最澄の教学と日蓮

—— 日蓮の『依憑集』『法華秀句』受容 ——

田村 晃祐 (31)

ブラジュニヤール (prajña) 再考

—— ウパニシャッドから仏教へ ——

渡辺 章悟 (73)

カビールのドーハー (二行詩)

—— その歴史と教説 ——

橋本 泰元 (88)

ヴァスバンドゥとアンセルムスの真理論

—— 比較哲学的研究 ——

笠井 貞 (106)

Pañcamasārasaṅghita 所説の観想圖像

清水 乞 (121)

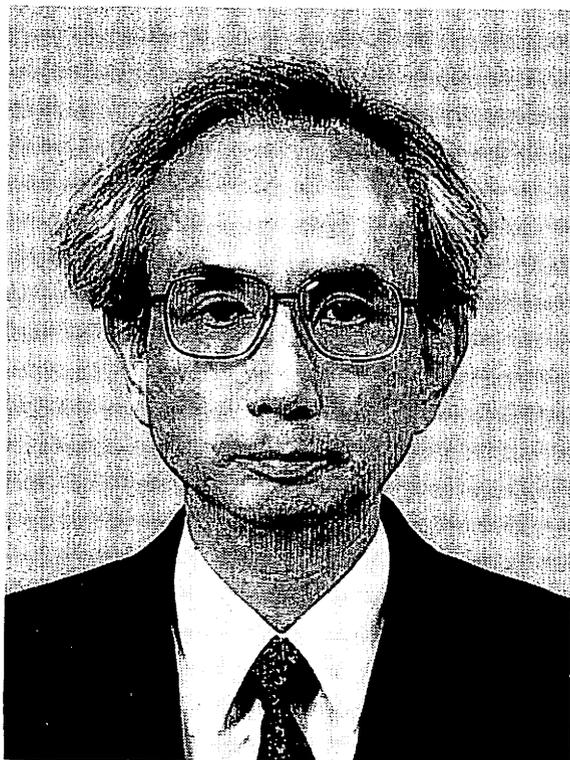
第二格の意味と用法①

—— Siddhāntakaumudī, Kārikāprakaraṇa 訳註 (2) ——

菅沼 晃 (141)

東洋大学文学部紀要第49集

印度哲学科篇



里 道 德 雄 教 授 遺 影

# 里道徳雄教授略歴・業績目録

## 略歴

- 昭和十二年四月十日 新潟県佐渡島に生まれる
- 昭和三十一年三月 早稲田高等学校卒業
- 昭和四十年四月 花園大学仏教学科禅宗学専攻入学
- 昭和四十四年三月 同大学卒業
- 昭和四十四年四月 東洋大学大学院文学研究科仏教学専攻修士課程入学
- 昭和四十六年三月 同大学院修了
- 昭和四十六年四月 東洋大学院博士課程入学
- 昭和四十九年三月 同大学院満期退学
- 昭和五十年四月 東洋大学文学部仏教学科助手
- 昭和五十四年四月 東洋大学短期大学日本文学科非常勤講師（昭和五十五年四月まで）
- 昭和五十六年四月 東洋大学文学部専任講師
- 昭和五十九年四月 東洋大学文学部助教授
- 平成二年四月 東洋大学文学部教授
- 平成七年七月三十一日 心筋梗塞により急逝

著書

- アジア仏教史・中国篇IV（第一章「朝鮮半島の仏教」執筆） 佼成出版社 昭和五十二年二月  
日本人の仏教7・日本仏教の宗派（第七章「臨濟宗」執筆） 東京書籍 昭和五十八年十月  
日本仏教典籍辞典（編集委員） 雄山閣 昭和六十一年十一月  
中国仏教に於ける出家と在家の問題 東京プレス 昭和六十三年三月  
図説日本仏教の世界VI（栄西・道元の禅と生涯）執筆） 集英社 平成元年四月  
西域中華海東仏祖源流（編著） 東京プレス 平成二年十二月  
東洋倫理思想史（共編著） 北樹出版 平成五年三月  
臨濟録を学ぶ―禅の話―上 日本放送出版協会 平成五年九月  
孝と先祖供養 東京本願寺出版部 平成五年十月  
臨濟録を学ぶ―禅の話―下 日本放送出版協会 平成五年十二月  
和訳般若心経―白隠禪師毒語解―（編著） 東京美術 平成六年一月  
生死一如 東京本願寺出版部 平成六年十月  
臨濟録―禅の神髓― 日本放送出版協会 平成七年三月

学術論文

地論宗の興起と展開について 『東洋学術研究』第十二卷第三号 東洋哲学研究所 昭和四十八年十一月  
慧光伝をめぐる諸問題 『大倉山論集』第十一輯 大倉精神文化研究所 昭和四十九年三月

菩提達磨とその周辺(一)―道育と僧副について―『東洋学研究』第十二号 東洋大学東洋学研究所 昭和五十三年

三月

慧光伝をめぐる諸問題(二) 『大倉山論集』第十三輯 大倉精神文化研究所 昭和五十三年三月

六祖獮獠考(一)―その問題点―『禅文化研究所紀要』第十一号 禅文化研究所 昭和五十四年六月

朝鮮仏教研究文献(一) 『日韓仏教』第一号 日韓仏教交流協議会 昭和五十四年七月

朝鮮仏教の宗派 『全仏』昭和五十四年八月号 全日本仏教会 昭和五十四年八月

朝鮮仏教研究文献(二) 『日韓仏教』第二号 日韓仏教交流協議会 昭和五十四年十二月

地論宗北道派の展開と消長―道寵伝を中心とする一小見―『大倉山論集』第十四輯 大倉精神文化研究所 昭和五

十四年十二月

『西域中華海東仏祖源流』僧名索引稿―朝鮮仏教僧名集成Ⅳ―『東洋学研究』第十四号 東洋大学東洋学研究所 昭

和五十五年三月

『禅宗哲学大意』『学祖井上円了の学理思想の研究』東洋大学 昭和五十五年三月

朝鮮仏教の諸問題(一) 『日韓仏教』第三号 日韓仏教交流協議会 昭和五十五年十二月

『海東高僧伝』僧名索引稿―朝鮮仏教僧名集成Ⅲ―『東洋学研究』第十五号 東洋大学東洋学研究所 昭和五十六年

三月

朝鮮仏教に於ける八閔齋会について 『宗教研究』第二四六号 日本宗教学会 昭和五十六年二月

朝鮮仏教における八閔齋会考―その歴史的展開―『西義雄博士頌寿記念論集 菩薩思想』大東出版社 昭和五十

六年五月

中国八閩齋会初探 『宗教研究』通巻第二五〇号 日本宗教学会 昭和五十七年二月

道士張寶伝考 『東洋学論叢』(東洋大学文学部紀要)第三十五集 東洋大学 昭和五十七年三月

朝鮮仏教の諸問題(二) 『日韓仏教』第四号 日韓仏教交流協議会 昭和五十八年二月

敦煌文献にみられる八閩齋関係文書について 『東洋大学大学院紀要』第十九集文学研究科 東洋大学大学院 昭和

五十八年二月

八閩齋会初探(二) 『宗教研究』第二五五号 日本宗教学会 昭和五十八年三月

高麗仏教に於ける八閩会の構造 『東洋学研究』第十七号 東洋大学東洋学研究所 昭和五十八年三月

新羅護国思想の構造 『日韓仏教學術大会報』日韓仏教交流協議会 昭和五十八年十月

陸修静撰「受持八閩齋文」について 『宗教研究』第二五九号 日本宗教学会 昭和五十九年三月

韓国仏教に於ける護国思想の構造 『日韓仏教』第六号 日韓仏教交流協議会 昭和六十年二月

韓国仏教の諸問題(三) —西天求法— 『日韓仏教』第七号 日韓仏教交流協議会 昭和六十年八月

心学と旅信仰 — 一般者から個者への道・伊勢詣をめぐる — 『昭和五十九年度特別研究報告書』東洋大学 昭和

六十年十月

隻履考 — 市井に生きる聖者の燈 — (一之上) 『東洋文化』復刊第五十六号 無窮会 昭和六十二年三月

中国八閩齋会初探(三) 『宗教研究』第二六七号 日本宗教学会 昭和六十一年三月

釈宝唱伝の基礎的研究 『大倉山論集』第十九輯 大倉精神文化研究所 昭和六十一年三月

南朝三僧伝の研究(一) 『東洋学研究』第二十号 東洋大学東洋学研究所 昭和六十一年三月

中国南北朝期に於ける八閩齋会について 『東洋大学大学院紀要』第二十二集文学研究科 東洋大学大学院 昭和六

十一年三月

心学思想と実学 — その成立の意義と影響（その一試論） — 『昭和六十年年度特別研究報告書』 東洋大学 昭和六十一年十月

雙履考 — 市井に生きる聖者の燈 —（一之中） 『東洋文化』復刊第五十八号 無窮会 昭和六十二年三月

明治初期臨濟宗に於ける国民道德論 『特別研究報告書』 昭和六十一年度自由課題 東洋大学 昭和六十二年九月

初期日韓仏教の姿と中国 『日韓仏教』第八号 日韓仏教交流協議会 昭和六十二年十二月

中国に於ける先祖供養 — 仏教儀礼の発現と展開 — 『真理と創造』二十七・二十八合併号 中央学術研究所 昭和六十二年十二月

十二年十二月

『太上洞玄靈宝一部伝授儀』中の九戒について 『大倉山論集』第二十三輯 大倉精神文化研究所 昭和六十三年三月

中国仏教に於ける菩薩僧 『金岡秀友博士還暦記念論文集』大乘菩薩の世界 佼成出版社 昭和六十三年七月

廃仏の波と仏教の再建 — 雲照の場合 — 『昭和六十二年度特別研究報告書』 東洋大学 昭和六十三年十一月

安藤昌益の諸国観 『昭和六十三年度特別研究報告書』 東洋大学 平成元年十月

雙履考 — 市井に生きる聖者の燈 —（一之下） 『東洋文化』復刊第六十三号 無窮会 平成元年十月

『六祖壇経』と道忠禪師解 『大倉山論集』第二十七輯 大倉精神文化研究所 平成二年三月

三教合一の立場 — 『川合清丸研究』序論 — 『平成元年度特別研究報告書』 東洋大学 平成二年十月

明治維新に於ける仏教 — 雲照と洪川 — 『大倉山論集』第二十八輯 大倉精神文化研究所 平成二年十二月

婆子考 『東洋学論叢』（東洋大学文学部紀要）第四十四集 東洋大学 平成三年三月

真如親王に見る光と影 『一九九〇年度特別研究報告書』 東洋大学 平成三年十月

維摩信仰の形成 『塩入良道先生追悼論文集 天台思想と東アジア文化の研究』 山喜房仏書林 平成三年十二月  
 僧法尼と誦出經典群 ―南朝偽経成立の一断面― 『東洋学研究』 第二十七号 東洋大学東洋学研究所 平成四年三月  
 仏教の社会的関わり ―五戒八斎戒の現代的意義― 『真理と創造』 三十三号 中央学術研究所 平成四年十二月  
 道安と羅漢 『西村恵信教授還暦記念論文集』 花園大学 平成五年三月  
 安藤昌益の諸国観 (一) 『大倉山論集』 第三十四輯 大倉精神文化研究所 平成五年十二月  
 『臨濟録』に見る「真正の見解」とその構造 『アジアにおける宗教と文化』 東洋大学東洋学研究所 平成六年三月  
 真如親王渡天に見る光と影 『東洋学論叢』 (東洋大学文学部紀要) 第四十八集 東洋大学 平成七年三月

#### 研究発表

朝鮮僧に見る求法と国外伝法の形態 日本印度学仏教学会 昭和五十年五月  
 日本の禅 ―「日本人の精神生活と禅」をめぐって― 大倉精神文化研究所 昭和五十年十月  
 魏訳撰大乘論と撰論宗 東洋大学東洋学研究所 昭和五十一年一月  
 撰論宗の展開と大論衆 日本印度学仏教学会 昭和五十一年六月  
 日本東洋学の伝統と視点 ―大正期東洋学をめぐって― 大倉精神文化研究所 昭和五十一年十一月  
 日本に於ける身体観の変遷 ―身体とは何か― 大倉精神文化研究所 昭和五十四年十二月  
 朝鮮八閩齋会考 日本宗教学会 昭和五十五年十月  
 古代日本に於ける国家観形成と仏教 大倉精神文化研究所 昭和五十六年六月  
 中国八閩齋会初探 日本宗教学会 昭和五十六年十一月

- 中国八閩齋会初探 (二) 日本宗教学会 昭和五十七年十月
- 道士陸修靜撰八閩齋受持文について 日本宗教学会 昭和五十八年十月
- 初期日本仏教に於ける聖と俗 大倉精神文化研究所 昭和五十八年十月
- 新羅護国思想の構造 日韓仏教交流協議会ソウル学術大会 昭和五十八年十月
- 古代朝鮮に於ける神概念について 大倉精神文化研究所 昭和五十九年六月
- 朝鮮仏教に於ける聖と俗 大倉精神文化研究所 昭和六十年六月
- 中国八閩齋会初探 — 南北朝資料について — 日本宗教学会 昭和六十年九月
- 儒教と仏教 中央学術研究所 昭和六十二年四〜九月
- 鈴木正三の基本的立場 大倉精神文化研究所 昭和六十二年七月
- 維摩信仰の一視点 大倉精神文化研究所 平成元年二月
- 白隠と公案体系 大倉精神文化研究所 平成元年五月
- 黄檗来日 — 無著道忠『黄檗外記』を中心として — 大倉精神文化研究所 平成二年六月
- 婆子考 日本仏教学会 平成二年十月
- 梁代偽経の世界 — 法僧尼經典誦出事件 — 東洋大学東洋学研究所 平成三年二月
- 羅漢信仰の一断面 日本印度学仏教学会 平成三年七月
- 鈴木正三 大倉精神文化研究所 平成四年二月
- 初期中国仏教と羅漢信仰 日本宗教学会 平成四年九月
- 鈴木正三と因果物語 大倉精神文化研究所 平成五年一月

『羅漢広験記』と羅漢 仏教思想学会 平成五年六月

道歌研究の現状と展望 大倉精神文化研究所 平成五年十一月

### その他

中国の諸宗教年表 『アジア仏教史・中国篇Ⅲ』 佼成出版社 昭和四十九年一月  
研究ノート 『倫社・政経月報』 山川出版社 昭和四十九年十月

中国仏教史・朝鮮仏教史 『月刊百科アルファ』 アルファ研究所 昭和四十九年十一月

中国上代仏教史年表 『アジア仏教史・中国篇Ⅰ』 佼成出版社 昭和五十年五月

東アジア宗教史年表 『アジア仏教史・中国篇Ⅴ』 佼成出版社 昭和五十年十二月

シルクロード宗教史年表 『アジア仏教史・中国篇Ⅳ』 佼成出版社 昭和五十一年三月

中国後期仏教史年表 『アジア仏教史・中国篇Ⅱ』 佼成出版社 昭和五十一年六月

仏教儀礼あれこれ 『月刊しゃかむに』 一〜六 昭和五十一年六月〜昭和五十二年三月

仏教者にとって平和とは何か 『じべた』 山梨県宗教者会議刊 昭和五十一年十一月

一行禪師の師承をめぐって(一) 『月刊密教講座』 第一卷第九号 平河出版社 昭和五十一年十二月

仏教概論へ中国Ⅴ 『月刊密教講座』 第一卷第十号 平河出版社 昭和五十二年三月

一行禪師の師承をめぐって(二) 『月刊密教講座』 第一卷第十号 平河出版社 昭和五十二年三月

仏教概論へ中国Ⅳ 『月刊密教講座』 第一卷第十一号 平河出版社 昭和五十二年六月

一行禪師の師承をめぐって(三) 『月刊密教講座』 第一卷第十一号 平河出版社 昭和五十二年六月

- 仏教概論(中国) 『月刊密教講座』第一卷第十二号 平河出版社 昭和五十一年九月  
 一行禪師の師承をめぐって(四) 『月刊密教講座』第一卷第十二号 平河出版社 昭和五十一年九月  
 高麗版初彫年代について 『チャングナ』第五号 中央学術研究所 昭和五十七年一月  
 中国神異僧譚(一) — 杯度和尚伝資料調査 — 『東洋』第二十卷第一・三号 東洋大学通信教育部 昭和五十八年三月  
 中国神異僧譚(二) — 杯度和尚伝資料調査 — 『東洋』第二十卷第五号 東洋大学通信教育部 昭和五十八年五月  
 如是我聞について 『チャングナ』第十三号 中央学術研究所 昭和五十八年六月  
 弘法大師空海の総て 『歴史読本』昭和五十九年五月号 新人物往来社 昭和五十九年五月  
 日本仏教主要寺院一覽・日本仏教宗派総覧 『日本史総覧』第三卷 新人物往来社 昭和五十九年六月  
 臨済宗の名著・名品 『仏教經典の世界総解説』自由国民社 昭和六十年六月  
 「遺愛寺」「海印寺」「薬師寺」など四十六項目 『日本百科全書』講談社 昭和六十三年五月  
 「化地部」「天竜寺」など八十七項目 『仏教大事典』小学館 昭和六十三年五月  
 諏訪義純著『中国南北朝仏教思想研究』(書評) 『中外日報』 昭和六十三年六月  
 出家と在家 — 中国初期大乘仏教教団の悩み — 『チャングナ』一二〇号 中央学術研究所 昭和六十三年十一月  
 真如法親王 — 入竺求法への道程 — 『歴史読本』平成元年四月号 新人物往来社 平成元年四月  
 飛鳥年表(共編) 大倉精神文化研究所編『飛鳥文化』 国書刊行会 平成元年二月  
 図書館は誘う 『コスモス』八十五号 東洋大学図書館 平成元年二月  
 古代朝鮮と日本仏教 『本願寺』平成元年春季号 西本願寺教化研究所 平成元年五月  
 「大蔵経」など五項目 『仏教文化事典』佼成出版社 平成元年十月

- 「祖師禪」など十六項目 『岩波仏教辞典』 岩波書店 平成元年十二月
- 高僧伝物語（一）―高僧伝とその周辺― 『禪文化』 一三六号 禪文化研究所 平成二年四月
- 高僧伝物語（二） 『禪文化』 一三七号 禪文化研究所 平成二年七月
- 高僧伝物語（三）―訳経と中国仏教の始まり― 『禪文化』 一三八号 禪文化研究所 平成二年十月
- 仏教の先祖供養―中国的発現― 『大倉山講演集』 大倉精神文化研究所 平成三年三月
- 羅漢信仰 『仏教の開放と真理』 東京本願寺 平成三年七月
- 雪の国からの亡命（書評） 『日本文化会議』 平成三年七月号 文芸春秋社 平成三年七月
- 高僧伝物語（四）―訳経者達― 『禪文化』 一四二号 禪文化研究所 平成三年十月
- 『バシヤール』を読む（書評） 『チャネリング』 平凡社 平成三年
- 一休骸骨 『大倉山月例講話集』 第三輯 大倉精神文化研究所 平成四年十月
- 蓮如上人と一休禪師 『親鸞上人に学ぶゼミナール』 第三十二号 東京本願寺 平成四年十月
- 報恩の時 『親鸞上人報恩講』 真宗教化法刊行会 平成五年九月

## 研究室報告

- (1) 本年度は、専任教員に渡辺章悟助教を迎えた。平成元年より「宗教学概論」を非常勤講師として担当されてきた。本年度は「宗教学」、「インド哲学演習」、「仏教学演習」を担当された。
- (2) 平成七年七月三十一日、里道徳雄教授が、心筋梗塞のため急逝された。有縁の導師をいただき八月二日、御葬儀が執り行われた。享年五十八歳。明徳院千里通眼居士と称される。先生は長年、第二部主任を務めてこられ、平成七年四月より第一部主任に転じ、平成八年度より開始される新教育課程の実施にまさに取り組まれようとなさる矢先であった。学科運営に多大な貢献をなされた先生の御意志を継ぎ、学科教員全員は学科の進展に精励する所存である。なお、里道ゼミは由木義文先生が代行された。
- (3) 本年度の本学役職は、次の如くであった。森章司教授が評議員を継続された。大学院文学研究科委員長は、田村晃祐教授が本年度も担当された。
- (4) 平成七年五月七日、本年度も新入生歓迎球技大会（「ガングスの大氾濫」）をゼミ連絡会議の活躍により盛大に催すことができた。例年のごとくバレーボール大会であったが、学科教員に加えて教務一課職員の方々の参加も得ら

れ、有意義な一日を過ごすことができた。

- (5) 本年度の朝霞校舎でのティーチング・アシスタント（教育補助員）は、大学院後期課程の塩澤靖治君と岩井昌悟君が担当した。
- (6) 演習ゼミが本年度で五年を経たが、卒論提出者がⅠ部で六十一名、Ⅱ部が二十四名であった。
- (7) 本年度の優秀論文に対する褒賞は次の如くであった。田村芳朗奨学基金受賞者―青木知恵美（Ⅰ部）。勸学奨学基金受賞者―天羽香奈美（Ⅰ部）、大川仁美（Ⅱ部）。校友会学生研究奨励基金受賞者―松田敦之（Ⅰ部）、加藤千晶（Ⅱ部）、土倉宏（大学院）。

## 平成七年度業績

### 菅沼 晃

#### 〈論文〉

- 「ヒンドゥー教の輪廻と解脱観」『大法論』第六二巻四号（pp. 22—27）一九九五年四月「仏教をめぐるアジアの宗教・ヒンドゥー教」『大法論』第六二巻一〇号（pp. 100—107）一九九五年一〇月

“The Principle of Co-existence: A Buddhist View (Religion in the Age of Co-existence).” *Echoes of Peace*, vol. 49, pp. 6-10, NIWANO Peace Foundation.

1966. 1.

日 東洋大学

「第二格の意味と用法①—*Siddhantakamuti, Karakapa-karana* 訳註(2)」『東洋大学文学部紀要』第四九集 印度哲学

「仏教の歴史と文化Ⅰ インド」朝日カルチャー講座 一九九五年十月〜一九九六年三月 横浜市

科編「東洋学論叢」第二二号 pp. 140—161

「井上円了の哲学と宗教——向上門から向下門へ」『日本近代

田村晃祐

仏教史研究』一九九六年三月

△論文▽

「六波羅蜜としての禪定」『大法論』第六三卷三号、一九九六年三月

「大乘戒思想の展開(シリーズ東アジアの仏教四『日本仏教論』所収) 一九九五年九月二〇日 四二—八二頁 春秋社

△講演・講座など▽

〔再録〕最澄・徳一論争の発端(密教大系第六卷『日本密教Ⅲ』所収) 一九九五年三月三十日 法蔵館 二六七—二八〇頁

「共生の時代を生きる」生涯学習「円会」一九九五年五月一日

△その他▽

三日 春日部市

「伝教大師の思想と日本仏教(下)」『大法論』四月号 三六一—四三頁

「共生の心と世界平和」山口県美称市教育委員会 九月五日

美称市

△講演等▽

「観音の心・ヨーガの心」日本ヨーガ光麗会全国大会 一〇月一日 京都府宇治

井上円了先生について 四月十一日 附属牛久高校

「日本人と宗教」新座市教育委員会 新座市

八宗綱要講読 財団法人聖徳太子奉讃会 年五回

「観世音菩薩の話—観ることの意味について」生涯学習「円会」一〇月二二日 西武長瀬ホテル 埼玉県

聖徳太子から親鸞へ 五月二十七日 築地本願寺仏教文化講座

「東洋の智慧に学ぶ—心身一如の身体観」東京日産販売 東京新宿

自由自在に生きる 十一月十一日 東洋大学市民大学講座

「法頭のインド旅行」日本仏教徒懇話会 十二月十二日 高崎市

(川越)

「日本人の宗教観」甫水会城北支部 一九九六年一月二十一日

仏教者の生き方 十一月二十八日 国士館大学倫理学研究室

その他

清水 乞

〈論文〉

『Saṅgīadarpana 所説の観想図像 (tagadhyaṅa)』

『東洋大学文学部紀要』第四八集 平成七年三月 pp. 126—152.

森 章司

〈論文〉

『僧伽運営の理念』『仏教学』第三七号 平成八年三月

『破僧考』『大倉山論集』第三八輯 平成八年三月 一一—三九頁

『近世における真宗教団』『異安心と妙好人』『近世における日本人の精神生活』統群書類従完成会刊所収 平成八年三月

『律蔵における破僧と部派分裂』『宗教研究』三〇七号 平成八年三月

『縁起と縁起説(下)』『東洋大学文学部紀要』第四九集 平成八年三月 pp. 13—30

〈研究発表〉

『僧伽運営の理念』滅諍法をめぐって』仏教思想学会第十一回学術大会 平成七年七月一日 於大正大学

『律蔵における破僧と部派分裂』日本宗教学会第五四回学術大会 平成七年十一月十一日 於沖繩国際大学

〈その他〉

『阿含経典』『大法論』六二—五 大法輪閣 平成七年五月  
社会活動  
大倉精神文化研究所研究部長、中央学術研究所講師

笠井 貞

(平成七年一月より十二月までの業績)

〈論文〉

『Nāgārjuna and Spinoza on the Truth—A Study in the Comparative Philosophy—』『印度学仏教学研究』第四三

巻第一号 平成七年三月  
『道元禪師と聖アウグスティヌスの心』について』『宗学研

究』第三七号 駒沢大学宗学研究所 平成七年三月  
『龍樹とアンセルムスの真理論—比較哲学研究—』『東洋大学

文学部紀要』第四八集 平成七年三月 六六—八一頁

橋本泰元

〈論文〉

『カビールのドーハー(二行詩)—その歴史と教説』『東洋大

学文学部紀要』第四九集 平成八年三月 pp. 87—104  
〈研究発表〉

『チャルヤー・ギーティ(「行の讃歌」)の思想について』真  
言宗豊山派宗学研究所研究例会 平成七年一〇月一七日

〈その他〉

「ナーナクヒーンドゥー教・イスラム教の統合者」『人物世界』  
史4 東洋編 山川出版社 一九九五年七月 二六一—二九  
頁

#### 渡辺章悟

(平成七年一月より十二月までの業績)

#### 〈著書〉

『大般若と理趣分のすべて』 単著 平成七年四月一日 溪水社 A5 五八七頁

#### 〈その他〉

「舍利礼文」(1)『曹洞禅グラフ』一九九五年冬号 平成七年一月一日

「舍利礼文」(2)『曹洞禅グラフ』一九九五年春号 平成七年三月一日

「大悲心陀羅尼」(1)『曹洞禅グラフ』一九九五年夏号 平成七年六月一日

「大悲心陀羅尼」(2)『曹洞禅グラフ』一九九五年秋号 平成七年九月一日

#### 〈研究発表〉

「般若について」 東洋学研究所研究例会 平成七年五月十三日 於東洋大学

#### 〈調査活動〉

一九九五年八月二七日～九月九日 インド・ニューデリーの

インド国立古文書館にてギルギット出土のサンスクリット  
仏典の写本を調査。

#### 平成七年度ゼミ活動報告

#### 渡辺章悟

インド哲学演習Ⅰ 朝霞

- (1) テーマ「有の哲学と無の哲学」
- (2) メンバー 越後克実(幹事) 他二年生六名(内一名長欠)、三年生一名、聴講者一年生一名、三年生一名
- (3) 活動報告

このゼミの目的は、サンスクリットの読解力の向上を第一の目的とする。そのために、まずできるだけ多くの文献を読んで、サンスクリットに親しんでもらうことにした。ただし、インド哲学演習ということであるから、インドの伝統的哲学文献の中でも最もよく知られた『チャンドーギャ・ウパニシャッド』を選び、これによって古代インドの哲学的文献の一端に触れてもらうことを第二の目的とした。

ゼミとはいってもサンスクリット講読が中心であったが、その限りではうまく機能していた。ゼミの進め方としては、参加者の読解力の向上という実践的意味を持たせ、予め発表者を決めておいて、その担当者が毎回レポートを提出し、解説・発表を行なった。これからも実際にインド哲学の文献を

読む機会はあまりないので、その意味でも有益だったと思う。それぞれT Aの協力も得て、実に熱心に勉強していた。また参加者が少数であったこともあり、結果的に何度も発表する機会があったので、かえってそれが幸いした。学年末には全員かなり力がついてきたように思う。後期の後半には『サルヴァダルシャナ・サングラハ』を読んだが、これはかなり難解であり、テキスト選びに問題を残した。

なお、夏休みには白山のゼミと合同で豊岡セミナーハウスでの合宿(二泊三日)を行なった。授業もそうであったが、欠席者もほとんどなく盛会であった。

清水 乞

インド哲学演習2 朝霞

- (1) テーマ「芸術とイマジネーション」
- (2) メンバー 大島明子(幹事)他一八名
- (3) 活動報告

二年生を対象とする基礎演習である関係上、内容の理解よりも、資料の種類、性質など資料の客観的批判の訓練に重点を置くことにした。テキストは写本と刊本二種を用意して、この三者の相違を指摘することに努めた。この結果、刊本の間にも異同があり、更に写本を参照することにより、いずれのテキストの読みを採用するべきであるか、といったテキストに対する批判的態度、扱い方は身についた

と思う。テキストの内容理解に関しては、T A塩沢君が担当者を決め、かつ予習に際して助言し、毎時間レジメを出した上で担当者の和訳を発表した。学生諸君も熱心であったが、T Aの存在は大きかった。

清水 乞

インド哲学演習1 白山I・II部

- (1) テーマ「インド美学と芸術」
- (2) メンバー I部 幹事鈴木健一(三年)、三年生九名(内一名長欠)、四年生九名(内一名長欠)。II部 幹事田中茂樹(三年)、二年生九名(内一名長欠)、三年生八名(内一名長欠)、四年生七名(内一名長欠)。
- (3) 活動報告

本ゼミはサンスクリット語テキストを資料として、参加メンバー各自が課題としている芸術分野の主題を解明することを目標としている。現実には目標とはほど遠い。演劇、文学、音楽、画像、絵画技法などのテキストはあるが、テキストの選定、解説に難渋して、自主的な研究が進んでいない。この点が、毎年のことながら、反省点である。

自主的な研究が進まない故、日常的には、インド美学の基礎概念である「ラサ」を共通課題として、『サーヒティヤ・ダルパナ』の「ラサ」の部分を読読した。輪読に入る前に、清水が「ラサ」について概説し、予備知識を提供し

た。

十一月以後は四年生による卒論発表を行ない、論文制作上の注意を兼ねて、形式上の批判をした。三年生からの質問、批判を期待したが、必ずしも、活発とはいえなかった。

恒例のⅠ部・Ⅱ部合同の勉強会を九月十三・十四日の両日、図書館で行なった。

## 菅沼 晃

### インド哲学演習2 白山Ⅰ部

- (1) テーマ「インド思想の人間観」
- (2) メンバー 松田敦之(幹事)、武田賢司(記録係)。四年生九名、特別参加大学院生十一名
- (3) 活動報告

本ゼミは二つの問題、すなわち、(一)サンスクリット文法をインドの伝統的な方法で学び直すこと、(二)サンスクリット(チベット語訳を含む)原典を用いてインドの哲学・宗教において人間がどうとらえられているかを考察することを目指すとしている。

第一の課題については T.K. Ramachandra Aiyar. *Exercise in Sanskrit Translation*, Palghat, 1985 を用いて第七章までを読み、サンスクリットの法と態について理解を深めることができた。第二のテーマについては、それぞれ

が興味をもつテーマに従って三つのグループに分け、それぞれに自主参加の大学院生に入って貰い、それぞれのグループが文法発表三回、思想研究三回の合計六回の発表をした。

A班 仏教班 「中観派の二諦説」「中観荘嚴論における二諦説の定義」など。

B班 「インドにおける理想の女性」「ナラ王物語」を中心に「理想の夫・理想の妻」「マヌ法典」による」など。

C班 「なぜ浄であるべきか」「マヌ法典」における贖罪観について」「浄不浄の定義について」「行為の帰結(輪廻)」など。

ゼミ合宿 平成七年九月一〜三日、稲取ゼミナーハウス。学部ゼミ、大学院、インド思想研究会合同合宿。ゼミ卒業生も加わり、合計約五〇名が参加した。サンスクリット文法の学習、ラーマーヤナの講読、四年生は卒論の中間発表、大学院生はテーマに関する研究発表を行なった。一年生(研究会会員)から後期課程院生、さらに卒業生が参加する合同合宿はきわめて意義があるものであり、今後、このような機会を更に多くしたいと考えている。

## 森 章司

### インド哲学演習3 白山第一部

- (1) テーマ「戒律研究」

(2) メンバー 森光良(前期ゼミ幹事、四年)、徳留祐輝(後期ゼミ幹事、三年) 他一三名

(3) 活動報告 今年度は「インド法と仏教法の比較研究」を年間テーマとして設定し、これを個人的に研究して教室で発表、質疑応答するという方法を取った。

四月中は森が仏教の戒律とインド法について概説。五月は、新図書館の利用実習と、三年生を中心にインド法に関するまとめの発表、および「マヌ法典について」(中村II四年)の発表を行った。

六月からバーリの *paṭimokkha* に関する研究発表。「波羅夷罪と現代日本法の比較」(遠藤)、「不定法の研究」(三好)、「僧残罪と四波羅夷法」(中村II三年)、「偷闌遮罪について」(森)、「十三僧残法の四分律・五分律の比較」(山田)、「金銀錢トラブルで生じる *nissaggiyapaccittiya*」(徳留)、「仏教の刑罰思想」(西村)、「仏教の戒律思想—動機主義か結果主義か」(弓削田)などの発表があった。

夏休み中には、九月十五日・十六・十七日の三日間の予定で、伊豆稲取の大学のセミナーハウスで合宿に入ったが、折りからの戦後最大級の台風が伊豆半島に上陸するというので、十六日の午前中に四年生の中間発表を大急ぎで済ませて、昼食をして切り上げた。そこで、合宿中にこなす予定であった、三年生の卒論を視野にいたる自由研究の発表が九月からの後期の通常時間に食い込む結果となっ

た。発表者と題目は以下のとおり。

「比丘波羅提木叉に見る仏教僧伽の在家者への態度」(三好)、「戒の現実への適用と悪用」(徳留)、「唯識三十頌における三性説」(吉田)、「布薩における波羅提木叉の誦出」(中村II三年)、「戒律による比丘裁判と処分法」(遠藤)、「偷闌遮について—第二波羅夷罪の矛盾」(弓削田)、「大乘戒に見る出家僧と在家信者」(波多野)、「罪の告発と懲罰制度について」(小栗) など。

また四年生の卒論報告を再度行った。「宗教と死生観」(西村)、「ガンジーと国民会議派の不可触民解放政策」(山田)、「マヌ法典について」(中村II四年)、「女性学から見た律蔵」(森) などである。

なおこの間、「マヌ法典」の索引を作る作業を行った。全員で分担してカードを採り終り、今年度の「森ゼミ紀要」に掲載予定である。

次年度計画「戒律研究」を発展的に解消して「原始仏教研究」と改める。従来は「律蔵」が中心となっていたが、これに「経蔵」「論蔵」を加え、より多角的な視点から仏教における出家僧侶の生活と教団運営の実際を研究しようとするものである。

#### インド哲学演習3 白山第II部

(1) テーマ「戒律研究」

(2) メンバー 福家昌浩(前期ゼミ幹事、四年)、小野博嗣

(後期ゼミ幹事、三年) 他三名

(3) 活動報告 今年度はゼミ員を大乘戒グループ・パーリ律グループ・マヌ法典グループ・現代法グループの四グループに分け、前期テーマを「善悪の基準」、後期テーマを「性に関する規定」としてグループ研究を行った。

四月・五月は森が「戒律概説」、また新図書館の利用実習を行った。

六月から研究発表。「宗教と現代法における善悪の接点について」(現代法⇨発表担当者⇨西)、「梵網經」における善悪の基準」(大乘戒⇨発表担当者⇨小野)、「マヌ法典における浄・不浄觀念と善悪の基準」(マヌ法典⇨発表担当者⇨海瀬)、「パーリ律における善悪の基準」(パーリ律⇨発表担当者⇨岡田)、「比丘波羅提木叉における善悪の基準」(パーリ律⇨発表担当者⇨吉田)、「梵網經」における善悪の基準の方向性について」(大乘戒⇨発表担当者⇨小橋)、「食事に関するタブーと善悪の基準」(マヌ法典⇨発表担当者⇨大川)

夏休み中には、九月十五・十六・十七日の三日間の予定で、伊豆稲取の大学のセミナーハウスで合宿に入ったが、折りからの戦後最大級の台風が伊豆半島に上陸するといっているので、十六日の午前中に四年生の卒論中間発表を大急ぎで済ませて、昼食後解散した。そこで、合宿中になす予定であった三年生の卒論を視野にいたれた自由研究が九月から

の後期の通常時間に食い込む結果となった。また、合宿参加者が少なかつたことも懸案事項として残った。

卒論中間発表と自由研究のテーマ・発表者は以下のとおり。「日本仏教における地獄觀」(藤ヶ崎)、「別住・不共住の研究」(田中)、「マヌ法典の肉食について」(大川)、「真言立川流の哲学」(小野)、「日本の近代化と宗教の果たした役割」(西)、「破戒・破僧について」(福家)、「現代における阿含経觀」(岡田)、「日本における戒律の問題——日本になぜ戒律が根付かなかつたか」(岩下)、「草木国土悉皆成仏」(田口)、「阿闍梨和尚について」(金子)、「極微について」(中園)、「廬山慧遠の道」(小橋)。

後期テーマである「性に関する規定」については、「尊属殺人と墮胎について」(現代法⇨発表担当者⇨田口)、「僧伽における性の問題について」(パーリ律⇨発表担当者⇨田中)、「贖罪について」(マヌ法典⇨発表担当者⇨古性)、「理趣經に見る性の觀念」(大乘戒⇨発表担当者⇨岩下)、「現代水子事情」(現代法⇨発表担当者⇨西) などの発表があった。

次年度計画 第一部に同じ

橋本泰元

インド哲学演習4 白山I部

(1) テーマ「ヒンドゥー教思想史研究」

- (2) メンバー 大城祐子(三年、幹事) 他三年生四名、四年生一名

(3) 活動報告

昨年度に引き続き、バクティ(信愛・帰依)の宗教思想の研究を主目的とした。年度初めに、新入ゼミ生に対して担当者が、ごく簡単にヒンドゥー教思想史におけるバクティ思想の位置を概説し、共同で読解作業をこれまで続けてきた『パーガヴァタ・プラーナ』(ラーサの五章)の内容を概説した。この後、四年生には卒論を目標にした自主的研究の成果を、毎時限一名のペースで発表してもらい、担当者がコメントを加え、参考文献等の提示も行った。四年生の自主研究の分野が必ずしもバクティ思想に限ったものではなかったこと、新入ゼミ生のヒンドゥー教史に対する知識が広範なものではなかったことにより、ゼミでの活発な討論はできなかった。前期末頃より、四年生の卒論中間発表と論文執筆の指導を中心に授業を進めていったため、三年生の積極的な参加が得られなかった。反省すべき点である。

インド哲学演習2 白山II部

- (1) テーマ「ヒンドゥー教思想史研究」  
(2) メンバー 遠藤和呼(幹事、三年) 他二年生二五名、三年生九名、四年生六名  
(3) 活動報告

昨年度に引き続き、バクティ(信愛・帰依)の宗教思想の研究を主目的とした。年度初めに、新入ゼミ生に対して担当者が、ヒンドゥー教思想史におけるバクティ思想の位置をごく簡単に概説し、共同で読解作業を続けている『パーガヴァタ・プラーナ』(ラーサの五章)の内容を概説した。この後、この資料の輪読に入り、二・三年生には自主的研究として、インド学に関する文献の紹介・書評を中心に毎時限一名のペースで発表してもらい担当者がコメントを加える作業を続けた。四年生には、前期末頃より卒論のための資料読解の中間発表から始めて、それ以後は中間発表に切り換えた。ゼミ中の発表に対して活発な討論が行われたとは言えない。発表者の問題意識、知識の範囲と応答者のそれとの重なり合いが多くないことに原因があり、反省すべき点である。

里道徳雄

仏教学演習1 白山I部

- (1) テーマ「中国仏教研究」  
(2) メンバー 笠井文雄(幹事) 他三年生六名、四年生十名  
(3) 活動報告  
各学生の研究課題に沿って研究発表を行った。毎週担当者が発表し、その後の時間を質疑応答及び、補足説明にあてた。原則として、毎月第四週目の授業時に、その月に進

めた研究をレジюмеにして提出することを義務づけた。

#### 仏教学演習Ⅰ 白山Ⅱ部

- (1) テーマ「中国仏教研究」
- (2) メンバー 佐藤真城(幹事)他二年生二名、三年生六名、四年生四名
- (3) 活動報告

全ゼミ員が、各自の卒論テーマに沿って研究を行い、毎週二名程が中間報告を発表する。又、中間報告に対し、ゼミ内で討論が交わされた後、担当教員による卒論指導が行われた。

その他、月に一度、全員に中間報告書を提出させ、進行状況の確認を行った。

#### 田村晃祐

#### 仏教学演習Ⅱ 白山Ⅰ部

鎌倉仏教の総合的研究を志し、平安末期の仏教の動向の研究から始め天台宗系の良忍・奈良法相宗の良遍を終え、本年度は浄土宗の開祖法然と主著『選択集』について研究を行った。

学生を六班に分け、第一班法然の経歴、第二班『選択集』巻末の総括の部分の読解、第三班第三章前半、第四班第三章後半、第五班第八章前半、第六班第八章後半の割り合てを行った。

但し、実際には十月十一月の二ヶ月は、卒業論文の中間発表者が十名により、それに時間がとられ思うように進めることができなかった。尚、第一・二・四章について内容の概略を田村が行った。

#### 幹事 児島豊和、副幹事 中村一平

また恒例の春・秋の近郊旅行、九月の二泊三日の研究旅行を行った。春は法然研究に因んで鎌倉の浄土宗大本山光明寺を中心にして鎌倉の寺院を巡った。九月は、豊岡のセミナーハウスで一泊して研修を行った後、京都で浄土宗大本山知恩院、吉水草庵跡と伝えられる安養院、百万遍知恩寺・金戒光明寺などを見学して一泊、翌日は法然を批判した明恵上人高弁の高山寺、高山寺近くの梅尾神護寺、南下して西山の光明寺(ここは法然が比叡山を出て最初に落着いた場所であり、後に法然の遺骸を荼毘に付いた所であり現在西山浄土宗の本山となっている所)など、法然ゆかりの寺々を主として訪問した。

秋は、福島県いわき市の厥成寺阿弥陀堂を訪れた。平安中期の浄土廻遊式庭園の中に国宝の阿弥陀堂、国重要文化財の阿弥陀仏が安置されている。伝説では藤原清衡の娘が嫁に来て平泉に真似て阿弥陀堂を造ったという。

帰途、法然の弟子親鸞が『教行信証』を著した所と伝えられる茨城県稲田の西念寺、平安初期徳一が中神寺を建てたあとといわれる筑波山筑波神社を訪れた。

## 仏教学演習2 白山Ⅱ部

概要・旅行は一部に同じ。

二部は全体を五班に分け、第一班『選択集』最後の総括読解、第二班第一章概要発表、第三班第一章概要発表、第四班・第五班第三章読解、第四・五・六・七章各々第一・二・四・五班概要発表、第八章第一・三班読解の方針を立てたが、第四章どまりであった。

尚、その間、卒論中間発表三名、法然批判の研究の発表が行われた。

幹事、大森真衣子、副幹事 南雲啓安

## 渡辺章悟

### 仏教学演習3 白山Ⅰ部

- (1) テーマ「智慧の哲学」
- (2) メンバー 渡辺純子(幹事) 他三年生六名(内一名休学中)、聴講者大学院生二名
- (3) 活動報告

このゼミの主たる対象は、インド仏教の思想である。そのなかでも大乘仏教思想の中心を担った中観派のナーガールジュナ『根本中頌』をテキストとした。この文献を中心にさまざまな経論の研究に展開することが容易であるという目論見のもとに選んだのであったが、それはいまだ実現していない。

ゼミの進め方は、毎回担当者を決めてサンスクリットの読解のレポートを提出させ、それに基づいて担当者が解説し、それを批判して行くという方法を取った。この文献は偈頌という簡潔な形式と、哲学的に深い思索を示す内容を持つために、なかなかその意義までを正確に理解することは困難であった。しかし、一年間を通じて、読み進めた結果、本書に特有の用例や論法にはかなり慣れてきたようであった。

後期からは各自一章ずつ担当を決めて、それをまとめて発表してもらおうという形式に切り替えたが、これは参加者の語学力や表現力の差がかなり異なるため、発表にばらつきがあり、必ずしもうまくゆかなかった。

今回は初年度ということで、お互いにゼミという形式にも慣れず、手探り状態であった。特にその進め方では、こちらが望むような対話形式のゼミは、学生の興味ที่熟さない内に行なっても実行不可能であることを痛感させられた。次第に慣れた来年に期待したい。

なお、夏休みには白山のゼミ一部・二部と朝霞ゼミとで豊岡セミナーハウスにおいて合同の合宿を行なった。もっと勉強時間を増やしてもよいという声が出るほど熱心な学生もいたが、適当な時間配分で欠席者もほとんどなく盛会であった。聴講の大学院生二名も参加し、なかなか充実した合宿であった。

仏教学演習3 白山Ⅱ部

- (1) テーマ「智慧の哲学」
- (2) メンバー 春原高信（幹事） 他二年生八名（内長欠二名）、聴講者四年生一名
- (3) 活動報告

このゼミの主たる対象は、インド仏教の思想である。そのなかでも大乘仏教思想の中心を担った中観派のナーガールジュナ『根本中頌』をテキストとした。この文献を中心にさまざまな経論の研究に展開することが容易であるという目論見のもとに選んだのであったが、それはいまだ実現していない。

ゼミの進め方は、毎回担当者を決めてサンスクリットの読解のレポートを提出させ、それに基づいて担当者が解説し、それを批判して行くという方法を取った。この文献は偏頗という簡潔な形式と、哲学的に深い思索を示す内容を持つために、なかなかその意義までを正確に理解することは困難であった。しかし、一年間を通じて読み進めた結果、本書に特有の用例や論法にはかなり慣れてきたようであった。

後期からは各自一章づつ担当を決めて、それをまとめて発表してもらおうという形式に切り替えた。なかには非常によくまとまった発表もあったが、それぞれの発表者の語学力や表現力の差がかなり異なることもあって、必ずしもう

まくゆかなかった。

また今回は初年度ということで、お互いにゼミという形式にも慣れず、手探り状態であった。特にその進め方では、こちらが望むような対話形式のゼミは、学生の興味が熟さない内に行なっても実行不可能であることを痛感させられた。次第に慣れた来年に期待したい。

なお、夏休みには白山のゼミ一部・二部と朝霞ゼミとで豊岡ゼミナーハウスにおいて合同の合宿を行なった。

笠井 貞

仏教学演習4 白山Ⅰ部

- (1) テーマ「正法眼蔵講読」
- (2) メンバー 塚本伴樹（幹事） 他二十七名
- (3) 活動報告

道元の主著『正法眼蔵』を読むことによって、道元の思想内容を理解することを目的とする。それに基づいて、道元の印度・中国・日本思想史上における位置づけをし、また道元と同時代の新旧日本仏教思想との比較をして、それぞれの特色を把握する。更に思想系譜・思想形態を異にする西洋の哲学・宗教思想との対比をする。以上を目標に、本年度は、「弁道語」を中心に、学生自身が研究して輪番制で発表をして、質問・討論をした。

仏教学演習4 白山Ⅱ部

- (1) テーマ「正法眼蔵講読」  
 (2) メンバー 今田敏郎(幹事) 他二名  
 (3) 活動報告

道元の主著『正法眼蔵』を読んで、その思想内容を理解することを目的とする。それに基づいて、道元の仏教思想史上における位置づけをして、道元仏法の特徴を把握し、更に系統と形態が異なる西洋の哲学・宗教との対比を試みて、それぞれの特徴を探求する。以上のことを考慮して、本年度は、「仏性」・「摩訶般若波羅蜜」の巻などを、学生を中心に輪番で研究発表をして、討議をした。

### 平成七年度開講科目

#### Ⅰ部

サンスクリット文献講読	必修	朝霞	渡辺	郁子	仏教学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	田村	晃祐
サンスクリット文献講読	必修	朝霞	渡辺	郁子	仏教学演習Ⅱ・Ⅲ	選必	白山	渡辺	章悟
仏教学概論	必修	朝霞	森	章司	パトリ文献講読	選択	白山	石上	和敬
インド宗教史	必修	朝霞	橋本	泰元	仏教漢文講読	選択	白山	(休講)	
中国仏教史	必修	朝霞	里道	徳雄	法華経学概説	選択	白山	藤井	教公
日本仏教史	必修	朝霞	田村	晃祐	禅学概説	選択	白山	(休講)	
宗教学概論	必修	白山	笠井	貞	チベット文献講読	選択	白山	(休講)	
インド哲学特講Ⅰ	必修	白山	橋本	泰元	浄土学概説	選択	白山	五十嵐明宝	
インド哲学特講Ⅱ	必修	白山	由木	義文	密教学概説	選択	白山	金岡	秀友

インド美術

宗教学

宗教学

△Ⅱ部▽

仏教学概論

サンスクリット文献講読

インド宗教史

中国仏教史

日本仏教史

卒業論文

インド哲学特講Ⅰ

インド哲学特講Ⅱ

インド哲学特講Ⅲ

インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

インド哲学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(再履)

仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ

仏教学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ(再履)

禅学概説

選択 白山 清水 乞

人文 朝霞 筈井 貞

人文 朝霞 渡辺 章悟

必修 白山 森 章司

必修 白山 渡辺 郁子

必修 白山 橋本 泰元

必修 白山 里道 徳雄

必修 白山 田村 晃祐

必修 白山 眞柴 弘宗

必修 白山 金子 芳夫

必修 白山 由木 義文

選択 白山 清水 乞

選択 白山 橋本 泰元

選択 白山 森 章司

選択 白山 眞柴 弘宗

選択 白山 里道 徳雄

選択 白山 田村 晃祐

選択 白山 渡辺 章悟

選択 白山 筈井 貞

選択 白山 眞柴 弘宗

選択 白山 石井 修道

仏教漢文講読

チベット文献講読

密教学概論

法華経学概説

浄土学概説

インド美術

パリー文献講読

宗教学

選択 白山 進藤 英幸

選択 白山 金子 英一

選択 白山 島田 茂樹

選択 白山 (休講)

選択 白山 (休講)

選択 白山 (休講)

選択 白山 渡辺 章悟

人文 白山 渡辺 章悟

△大学院▽

印度哲学特論(インド浄土思想の研究)

印度哲学演習Ⅰ・印度哲学特殊研究Ⅰ

(大乘仏伝研究)

印度哲学演習Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ

(Kataka 理論の研究)

仏教学特論Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅱ

(Dhyāna の研究―Sadhana-māta を中心として)

仏教学特論Ⅲ

(禅宗語録の研究Ⅰ 黄檗断際禅師伝心法要(2))

仏教学演習Ⅰ・仏教学研究指導Ⅰ(正法眼蔵講読)筈井 貞

仏教学演習Ⅱ・仏教学研究指導Ⅱ 里道 徳雄

仏教学研究指導Ⅱ

〔法華玄義〕の研究

仏教学演習Ⅳ〔四分律行事鈔〕の研究

印度哲学特殊研究Ⅱ・印度哲学研究指導Ⅰ

(インド哲学・仏教学の諸問題)

仏教学特殊研究Ⅱ・仏教学研究指導Ⅰ

(天台教学の研究)

印度哲学特殊研究Ⅲ・印度哲学研究指導Ⅱ

(日本密教儀礼書の研究)

### 平成七年度卒業論文

#### 〈Ⅰ部〉

永松 賢道 食禅食悟 ― 典座教訓を読む ―

後藤 宏行 真如としての現成公案

西村 和也 山中他界と女人結界

錦織 達郎 観心本尊抄にみる日蓮の一念三千観

井上 和範 日蓮大聖人滅後の教団内の動向について ― 書翰を繙き身延派と富士門流の主張の相違を探る ―

竹廣 賢 親鸞における「三心即一心」の意

神澤雄次郎 一遍の思想における生死観とその現代性

塩川 裕二 提謂波利經の研究

塩野 幸司 三国時代の仏教の影響

奈良坂尚代 蓮如と一向一揆 ― 教えにはない門徒の行動 ―

田村 晃祐  
森 章司

菅沼 晃

田村 晃祐

清水 乞

茂呂 洋子 プラーナ成立期前後までのガネーシャ

天羽香奈美 弥勒の「救い」と約束の日

高田 圭子 「良寛禪師奇話」に見る良寛の生涯

志賀 律子 インドにおける理想の女性観

我妻 志穂 蓮華のシンボリズム ― 大悲胎藏生曇荼羅を中心として ―

福田 朋亨 日本仏教における能楽の意義 ― 謡曲の研究 ―

世阿弥の哲学 ―

吉川 哲史 性と宗教

北村 礼桂 殺人犯罪者に内在する宗教思想

遠藤 喜美 宗教と教育

松田 智也 道元の今日的意味 ― 道元の思想と人にみる自然と人間及び王法と仏法とのあるべき関係について ―

栗田 裕之 仏教における悪魔について

鈴木 洋子 道元の時間論 ― 有時 ―

大泉美貴子 「法華秀句」巻下にみる伝教大師最澄の円機已熟思想

細谷 智美 インドの女神信仰 ― パールヴァティーを中心にして ―

松田 敦之 『中観荘嚴論』における二諦説 ― 勝義と二種の世俗の関係について ―

山田公三郎 現代インドにおける不可触民差別の現状 ― 概



千葉由美子 宇宙卵思想にみるコスモゴニーの系譜

山田 哲 印度哲学伝統的正統派観念論の伝承 —『ウパ

デーシャ・サーハスリー』におけるシャンカラ哲

学の解脱論—

池田 信孝 地藏信仰 —閻魔と地藏の関係と二つの『十王

経』を中心にして—

野田 一郎 『大乘起信論』における言語と存在の諸相

青木知恵美 聖徳太子の仏教思想の研究 —『勝鬘經義疏』

を中心として—

## Ⅱ部

榎本 政己 大本教におけるシャーマニズム的要素

戸田 昌征 古典サンスクリット演劇の基本思想

石橋 昌人 Nātyasastra における現代インド舞踊との関

連性 —Abhinaya を中心に考察—

坂西 裕 密教的世界観に対する現代科学的解釈

油谷海太郎 形而上学に対する沈黙について

石川 美麻 民衆とともに生きた蓮如 —本願寺再興と幸福

への願い—

加藤 千晶 カーラチャクラ曼荼羅の研究

長谷川正身 唯識「転変論」における因果同時・異時の問題

について

阿部 恵子 ヨーガーストラにおけるヨーガ体系の一考察

今田 敏郎 神仏習合から本地垂迹への道

大川 仁美 『マヌ法典』における動物観の研究

大森真衣子 『弁道語』の思想

海原真由美 シャンカラの個性について

田中 里佳 律蔵にみる別住の研究

古性 大喜 安居健度の諸律比較対照表

星 弘子 不動曼荼羅

—宗教・美術における不動曼荼羅—

福家 昌浩 布薩羯磨について —仏教における和合布薩の

重要性—

太田俊太郎 古代インド都市構造における宗教性

堀口 啓一 輪廻の仕組みと事実性 —中有の解明と再生へ

の道程に於ける一考察—

伊藤 周太 『Vijnānabhairava』と瞑想

—瞑想とは何か—

海瀬 純 沙弥・沙弥尼戒の研究

亀山 純子 雲門の人と思想

—日日は好日と日常について—

藤ヶ崎 彰 布薩健度

郷 幸次 印度カリーとゴータマへのあこがれ

## 大学院修士論文

佐々木 正 初期ウパニシャッドの時代における生命観

—禁欲苦行主義的世界観などを中心に—

- 丸山 育美 日蓮における一念三千について
- 土倉 宏 「金剛頂経疏」と天台教学
- 中村 剛 「教行信証」における浄土
- 谷口 智美 実尊仁空の「観経疏弘深抄」における念仏観
- 鶴田 智哉 『中論』の研究「二諦論の位相について」
- 佐竹 正行 Saṃkṣepasāhita 第一章に見られる無明観
- 森藤 彰子 アートマ・ウパニシャッドにおける我の思想
- 三浦 宏文 初期ヴァイシェーシカ哲学研究 — Prastāsa-  
padabhāṣya の概念の検討
- 甲田 烈 Vīvekaṇanda の知識論
- 佐藤 淳一 『撰大乘論』における〈意〉についての研究

東洋大學論叢

(東洋大學文學部紀要第49集)

印度哲學科 篇

平成八年三月三十日 印刷

平成八年三月三十日 発行

〔非売品〕

発行所 東洋大學文學部

東京都文京区白山五丁目一八番〇号

電話 印度哲學科(五〇三) 三三三

印刷 日新印刷株式会社

東京都文京区大塚五十二番五十七

電話 〇三三九四三一四一一

# BULLETIN OF ORIENTOLOGY

Bulletin of the Faculty of Letters  
Toyo University

NO. 49

March, 1996

Series of  
INDIAN PHILOSOPHY

XXI

---

## CONTENTS

---

- Shōji MORI: *Pañcasamuppāda* as *Dhamma* and as *Sāsana* .....(13)
- Kōyū TAMURA: Saichō's Doctrine Adopted in Nichiren's Teaching  
.....(31)
- Shōgo WATANABE: The Reexamination on the *Prajñā* from  
*Upaniṣads* to Buddhism .....(73)
- Taigen HASHIMOTO: The Dohās (Couplets) of Kabīr  
—Their History and Teachings— .....(88)
- Tadashi KASAI: Vasubandhu and Anselm on Truth  
—A Study in Comparative Philosophy— .....(106)
- Tadashi SHIMIZU: *Rāgadhyaṇas* Described in *Pañcamasārasaṃhitā* ... (121)
- Akira SUGANUMA: A Japanese Translation and Notes of the  
*Siddhāntakaumudī, Kāraṅprakaraṇa* (II)  
—The Meanings and Usages of the Second Case  
(*dvitīyā vibhakti*).....(141)
- 

Published by  
**TOYO UNIVERSITY**  
Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo